

平成21年度海外学術調査総括班フォーラム
2009年6月27日(土)
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

地域コンフリクトに関わる ベトナム・フィリピン・インドネシアでの 現地調査から

伊藤哲司

(茨城大学, tetsuji64@ybb.ne.jp)

【科研費共同研究(基盤研究(B) 2007~2010年度)】
東南アジアにおける地域コンフリクトの
緩和・予防と「共生の知」の創出



メンバー

伊藤哲司(茨城大学・社会心理学)

横山正樹(フェリス女学院大学・平和学)

金光男(茨城大学・インドネシア地域研究)

木村競(茨城大学・哲学, 倫理学)

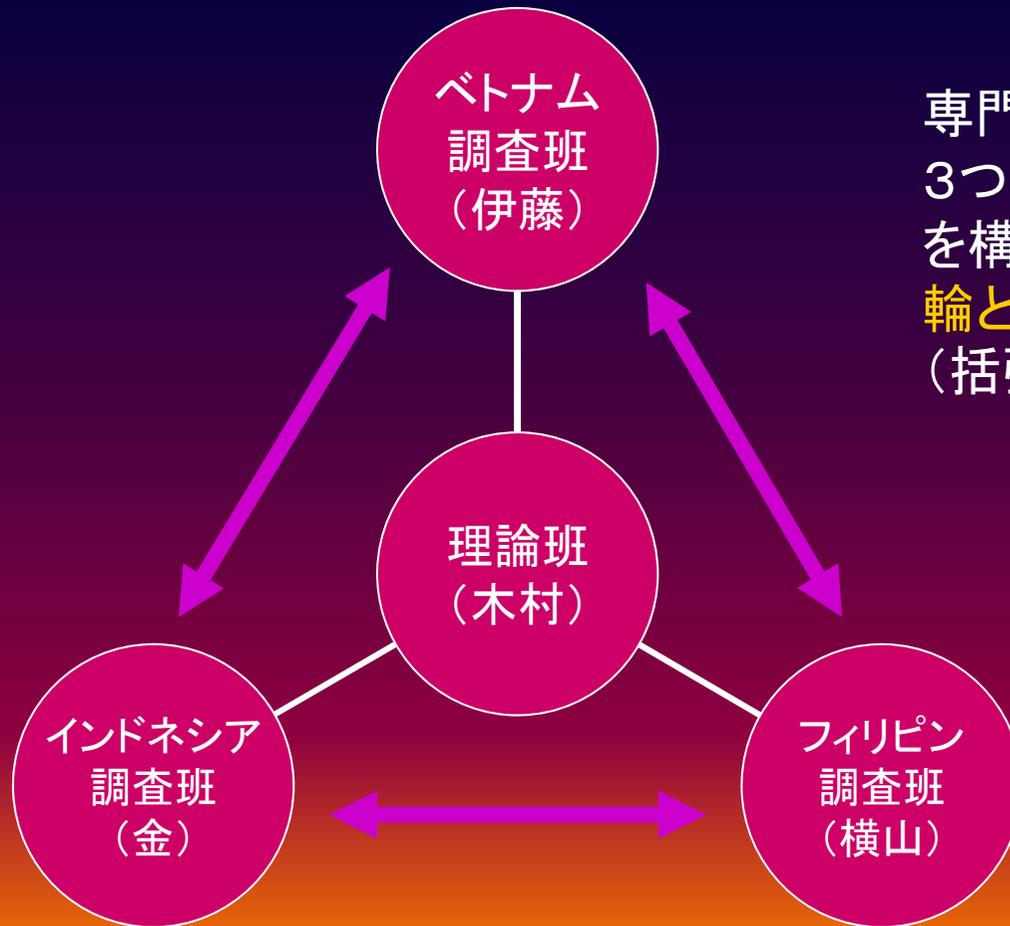
岩佐淳一(茨城大学・社会情報論)

京樂真帆子(滋賀県立大学・日本女性史)

蓮井誠一郎(茨城大学・国際政治学)

中川光弘(茨城大学・開発経済学)

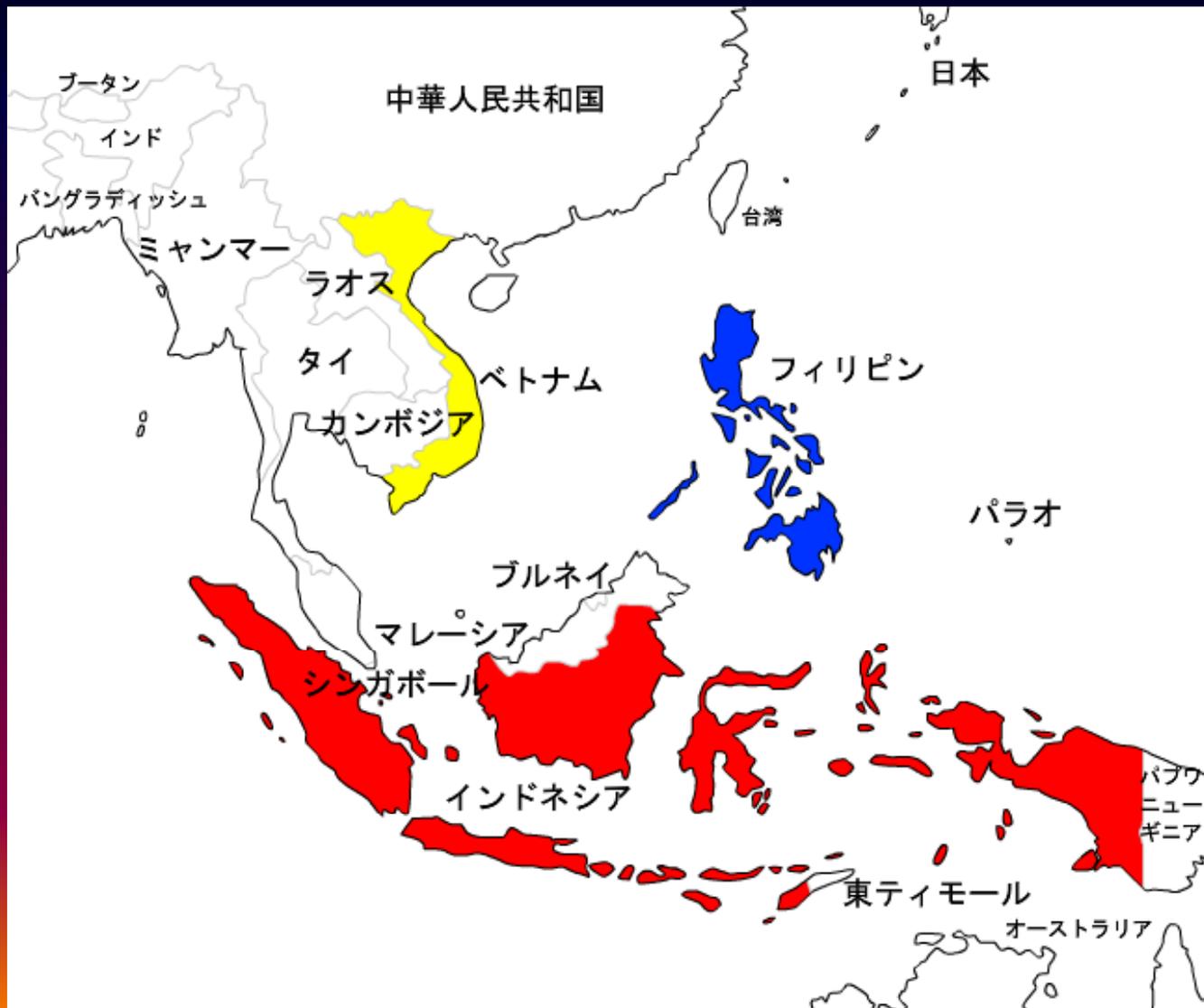
本科研費共同研究の体制



専門の異なる8人のメンバーが3つの現地調査班と1つの理論班を構成。現地調査と理論研究を両輪としてまわしつつ進めている。
(括弧内は各班の主任)

サステナビリティ学の研究教育を担っている茨城大学地球変動適応科学研究機関(ICAS)とも連携

調査対象地域



(<http://www.freemap.jp/>にて作成)

本研究の学術的背景



- 20世紀に東西冷戦構造の中で翻弄され、大国の代理戦争の一面を持つ大規模な戦争が発生
- 地域コンフリクトの問題が今でも根強く残っている。
- その緩和・予防のためには、上からの法政策的なアプローチだけでは不十分。下からの社会心理学的アプローチも必要
- 茨城大学地球変動適応科学研究機関(ICAS)の発足(2006年度)もきっかけとなり、このような学際的なチームを発足させることができた。
- 各メンバーのこれまでの実績も活かし、現地の大学や研究所等とも連携協力し調査を実施していくことに。

本研究の目的



- 明示的な紛争だけでなく、必ずしも顕在化していない、人々に共有された心理的葛藤をも包含する**地域コンフリクト**という概念に注目
- 地域コンフリクトの緩和・予防への方策が、どのような**共生の知**の創出に繋がっていくのかを検討
- とくに地域のマイノリティたちが、どのような歴史的記憶を有しているのかを、地道なインタビュー調査などで解き明かし、**共生の知**の創出に向けた道を探る。

ベトナム調査の概要



- ベトナム中部フエの元反戦運動家たちへのインタビュー調査
- ベトナム南部サイゴンの元南ベトナム兵士へのインタビュー調査
- 「英雄の母」へのインタビュー調査
- 神戸の在日ベトナム人（元難民）とその子孫のコミュニティへの参加観察・インタビュー調査



ベトナム調査の問題点と課題



- なお政治的な話題で話をしづらいベトナムの社会状況
- 元南ベトナム兵士へのアプローチが困難。警戒心を抱かれ、断られてしまうケースも
- 当局を通じてインタビューをアレンジしてもらおうと、バイアスのかかった状況が設定されがち
- しかし特定の場所で安全を確保した上でならば、比較的自由に語ってくれる人が出始めている。
- 今後はその繋がりを大事に、調査協力者を拡充していく予定

フィリピン調査の概要



- ネグロス西州 反政府勢力競合山間地
集落住民の生存戦略としての対国軍
「投降」
- ネグロス東州 アポ島禁漁区の成功
(近傍シキホール島禁漁区との比較対
照)
- 首都圏 タガイタイ・フォー事件(農民4
人不当拘禁)などの人権問題とその
「解決」
- バタンガス市 港湾開発ODA事業用地
住民移転問題と住民自主移転の成功
- フィリピンにおける「コンフリクト緩和文
化仮説」、つまり近隣諸国と異なりフィ
リピン国内コンフリクトでは1事件あた
り死者10名以上は例外的で、50名以
上の例が殆ど見られないほど、被害
の限定化が文化的に成立しているとい
う仮説検証およびその意味の分析

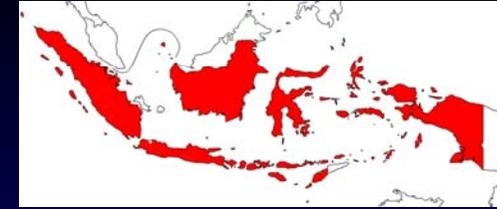


フィリピン調査の問題点と課題



- 基本社会コンフリクト1＝支配層・国軍と草の根の人びとの緊張関係の影響
- 基本社会コンフリクト2＝左翼勢力分裂(90年代初め)による党派対立の影響
- 人間関係・人脈に左右され、また誘導的になりがちなインタビュー結果
- 上記の影響を乗り越える信頼関係づくりに何年もかかり、さらに訪問の繰り返しが必要
- 古い事件や事例では30年以上経過し、関係者の一部は死去・行方不明
- 関係者の外国移住を含む移動が激しく、連絡が取りにくい場合も

インドネシア調査の概要



- ジャカルタ市、ジョクジャカルタ市、およびバンダアチェ市の大学生および大学教員・ジャーナリストたちを対象とする意識・イメージ調査を実施する。
- この調査は、地域的・エスニック的「葛藤」の有無、また「葛藤」が有るとすればどのような「葛藤」を感じているのか、できるだけ具体的に把握することを目標とする。
- 以上の点について、ジャカルタ市、ジョクジャカルタ市、バンダアチェ市において、文献資料の収集と、本調査の研究協力者との議論、打ち合わせを行った。



インドネシア調査の問題点と課題



- インドネシア側の調査協力者との打ち合わせの結果、バンドアチェ市においては現在「問題」があまりにもホットであり、感情の噴出もみられる為、「質問項目」の内容と問い方に慎重を期す必要がある。
- しかも、出身地域とエスニシティが概して単一的である為、「葛藤」意識・イメージが直截的均一的になる可能性もあり、さらなる検討を要する。
- ジャカルタ市、およびジョクジャカルタ市では、調査協力者も積極的であり、大学生などの出身地域の構成も複合的である為、より広範な調査が可能である。
- だが、限られた予算でどの程度のアンケート調査・聞き取り調査が可能かもっと検討する必要がある。さらに調査対象者をジャワ出身者とアチェ出身者に絞っていくことも検討している。

理論班の検討概要



- 平和学、倫理学等の蓄積から、当該地域での**地域コンフリクトの緩和と予防、共生**を構想するに役立つ**概念・アイデア・考え方**を抽出すること。(まず「**地域コンフリクトの緩和が生じていること**」を理解する枠組みから)
- 調査班の調査をもとに、**地域コンフリクトの多様性**を整理し、**差異と共通性の明確化**を行うこと。(調査のまとめ方についての考察、要請も含む)
- 両者を合わせて考察し、調査班による検証が可能な、ある程度具体的な**共生の知**の試案を作成すること。

まとめ



- ホットな地域コンフリクトが渦巻いているフィリピン・インドネシアと、地域コンフリクトが潜在化しているベトナム。それぞれ調査の困難さがある。
- 「地域コンフリクトの緩和・予防→共生の知の創出」とは必ずしも単純に進んでいかない。地域コンフリクトがありながら、そのバランスの中での共生が成り立っているように見える例も
- 現地の研究協力機関・研究者とも協力しつつ教育ゲームの活用、映画を媒介とした対話の試み(円卓シネマ)なども視野に入れ実践していく。
- さらなる展開を図りつつ、この学際チームによる共同研究を継続させていきたい。

今後の予定



- ベトナム・フィリピン・インドネシアでの協力関係の拡充と、更なる調査と理論的検討の積み重ね
- 可能なところから論文執筆へ（「聞き書きノート：ベトナム・フエの元反戦運動家たち」茨城大学人文学部紀要（印刷中）など）
- 学会等でも発表（2009年9月の台湾でのアジア太平洋平和研究学会でフォーラム開催予定）
- 科学研究費補助金前年度申請をし、共同研究の継続のためのさらなる基盤を確保へ